

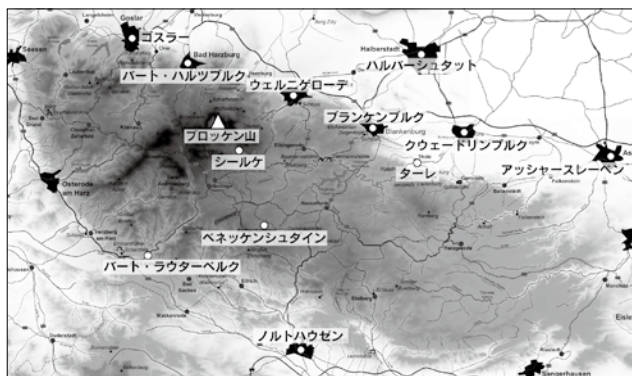
ノートゲルトに見る 「ハルツ山地の神話と伝説」

第1回

加藤 正宏

序

ハルツ山地は中世ドイツ語の「丘の森」を指すハルトまたはハートに由来し、ドイツ北部のニーダー・ザクセン州、ザクセン・アンハルト州、



ハルツ山地の地図

チュリンゲン州の境界に広がったドイツ中北部の東方に位置する山地地域を指す。面積は二、二二六平方キロメートル。最も標高が高いのはブロッケン山で、一四一メートル。話題に取り上げる都市には、ゴスラー (Goslar)、バート・ハルツブルク (Bad Harzburg)、ウエルニゲローデ (Wernigerode)、アッシャースレーベン (Aschersleben)、ハルバーシュタット (Halberstadt)、ブランケンブルク (Blankenburg)、クウェードリンブルク (Quedlinburg)、ノルトハウゼン (Nordhausen)、シールケ (Schierke)、バート・ラウターベルク (Bad Lauterberg)、ブロッケン (Brocken)、ベルガー (Berga)、ベネッケンシュタイン (Benneckenstein)、ターレ (Thale) などがある。

この山地地域は古くから神秘的な山、特に中世では魔女の住む山とし

て認知されてきた。ここには神々と神話上の生き物、魔女と悪魔、小人と巨人などのゲルマン人の間に伝えられてきた伝説や神話が多く見られる。ここがかつてのゲルマンの中心地であったことで、この地域がキリスト教化された後も、古いゲルマンの神々への信仰が人々の間で久しく生き続け、地域がキリスト教化される中で、その姿を代えて神話や伝説となつて生き続けてきた。

カール大帝 (シャルルマーニュ) によるキリスト教化にもかかわらず、サクソン人は異教的な犠牲祭を実践していた。キリスト教徒たちの注意を引かないように人里離れた場所で行った。このことを知ったカール大帝は、特にサクソン人たちの祝祭日にはキリスト教徒の衛兵を配置させ、その活動を統制させた。しかし、サクソン人たちは衛兵を追い払い、儀式を行えるようにするた

め、ブロッケン現象 (太陽などの光が背後から差し込み、影の側にある雲粒や霧粒によって光が散乱され、見る人の影の周りに、虹と似た光の輪となつて現れる大気光学現象) を活用し、「夜になるとブロッケンに人影が飛んでくる」という噂を流し、それぞれが変装して祭りに参加したという。

皇帝、王、教会の高官もハルツ山地にやつて来ており、したがって、ハルツには彼らの登場する伝説も見られる。また、ゲルマン文化への回帰に引かれてか、その後、ゲータやハイネらがハルツに滞在し、紀行などでこれらの一部を記していることでもハルツは知られる。

ハルツの一般の人々の仕事と生活の中心は、主に鉱業とそれに関連する鉱石処理産業で、鉱山としての開発には山の精霊や悪魔や巨人や小人の関わる伝説も多い。その悪魔との